

未来への伝承

土浦の古代玉作資料

たまつくりしりょう

今回の未来への伝承は、3月23日に新しく土浦市の指定文化財になった考古資料「烏山遺跡・八幡脇遺跡出土玉作資料」を紹介いたします。

この資料は、古墳時代の装身具である勾玉や管玉などの製作に関連する資料です。これらは、土浦市内の烏山遺跡と八幡脇遺跡の発掘調査で見られました。資料の作られた時代は古墳時代前期で、西暦4世紀代に当たります。

烏山遺跡の玉作資料は、烏山団地の造成に伴う昭和47(1972)年の発掘調査で見えられました。見つかった場所は、現在の烏山一丁目の烏山第一団地西側に当たります。

八幡脇遺跡の玉作資料は、おおつ野地内の土地区画整理事業に伴う平成3(1990)年(1992)年に行われた発掘調査で見つけられました。見つかったのは、現在のおおつ野五丁目の南側に係る地域です。

二つの遺跡とも、古墳時代前期のむらがあり、その中に一般的な住居と共に玉作り専用の工房が数軒並存していました。



八幡脇遺跡 メノウ勾玉未成品
製作途中の失敗品、割る時に生じた破片など

資料は、玉の製作に使う砥石などの工具と、製作途中で発生した玉材の破片、失敗などにより製作途中で放棄された未成品、一緒に見つかった土器などからなります。特に玉の未成品と石製の工具が豊富に出土していることが特色といっています。非常に細かい破片が多いことから、発掘調査時には工房の中の土を持ち帰ってふるいにかけて、資料を集めました。

玉の原材料には、メノウ、滑石、緑色凝灰岩などがあり、特にメノウの勾玉は鳥根県の国指定史跡出雲玉作跡とともに、国内最古の時期にあたります。緑色が多い玉の中で赤色のメノウは貴重であったことでしょう。

玉製作の様々な過程でできた未成品には、過程ごとの制作技法が痕跡として残ります。言い換えると、これらの痕跡を丹念に遡ってたどることで、より、勾玉作りの工程を復元することができま

す。烏山・八幡脇両遺跡の資料は大変豊富であることから、原石を割る荒割、玉の形に割っていく形割、砥石で磨く研磨、穴を通す穿孔、仕上げと一連の工程ごとの未成品がそろっています。研究の結果、メノウ以外の素材(緑色凝灰岩や滑石など)の玉作も、メノウと同じ工房で行っていることが分かりました。

また、玉作用の工具については、主に勾玉の内側部分を磨くために用いた内磨砥石は特色ある砥石と言われています。烏山・八幡脇両遺跡からは結晶片岩製の内磨砥石が出土しており、古墳時代

前期としては全国的に希少で、最古の出土例として重要です。

このような古墳時代の玉作遺跡は、土浦以外でも稲敷市、千葉県の成田市などでも発見されています。しかしながら土浦では、烏山・八幡脇両遺跡以外でも、工房の無い古墳時代のむらから玉作に関する資料が単独で出土することが少なくありません。実は、もともと玉作関係の遺跡が市内には残されているのかもしれない。

これらをふまえると、土浦の烏山・八幡脇両遺跡は、日本の古墳時代にメノウ製の勾玉が出現することに深く関わる遺跡として注目され、出土した玉作資料の歴史的価値は高いと言えます。

今回ご紹介した烏山遺跡と八幡脇遺跡の古代玉作り資料は、5月31日まで上高津貝塚ふるさと歴史の広場1階の展示ホールで展示中です。ぜひご覧になってください。

上高津貝塚ふるさと歴史の広場

(0826-7111)



八幡脇遺跡 玉作用砥石
板状の石で、勾玉の内側を磨く砥石